

知ることから始める「多様性」

国籍、社会、人種、民族、性別、性的指向、それぞれが持つさまざまなバックグラウンドに、あなたがどう向き合っていくのか考えてみませんか。そんなあなたに、ぜひ読んでほしい本を紹介します。

※書籍右横の番号はセンターでの検索番号です。



ほんとうの多様性について話をしよう

2022年 旬報社
サンドラ・ヘフェリン (著)

[700-2]

ドイツ人の父親と日本人の母親の間に生まれた著者の容姿は白人風で「外国人」に分類されてしまうことが多い。外国のルーツを持つ人が増えただけでは「多様な社会になった」とは言えない。日本での理不尽なルール^{ルールの}の状況を示し「多様な社会になるとは」を考える。著者はドイツの統合コースを例にして、文化の違いを言い訳に「事なかれ主義」にならない姿勢の大切さを示す。「多様性」はすべてを受け入れることではない。「包摂^{ほうせつ}していくこと」がほんとうの意味での多様性。

衝突を恐れず交渉していく心構えが大切。(ぽっと)



LGBTとハラスメント

2020年 集英社
神谷 悠一、松岡 宗嗣 (著)

[800-4]

近年「LGBT」への理解度は高まってきたが「当事者たち」に対する「差別」や「偏見」はいまだ続いている。職場で発せられる「嘲笑的な会話」や、「不寛容な対応」に耐え続けて心身の健康を害し、ときには命にかかわる事態にまで陥った「当事者たち」の苦しみはいかばかりであったかと思う。令和元年に成立した「パワハラ防止法」は学校や企業に対し、性に関するハラスメントである「SOGI^{ソジ}ハラ」と「アウティング」防止対策を順次義務づけていった。今、社会は環境の改善に向かい始めている。その詳細を本書が解説。(みっと)



スペシャルQトなぼくら

2022年 講談社
如月 かずさ (著)

[1200-2]

ある日見かけた「学年成績トップ」の男子中学生のユエ。彼はメイクをしてかわいい服を着ていた。その日から主人公ナオの世界が変わった。かわいいものが好きだった幼いころの自分を思い出していく。男子中学生のナオは、同性のユエに惹かれていく自分に戸惑い、悩む。ユエは「LGBTQ」の「Q (クエスチョニング)」だという。セクシャルマイノリティの苦悩を抱えながらも前に進もうとする彼らと、その彼らと同世代の理解者たちのやりとりに、多様な性の新しい未来を感じる。おとなにもおすすめの一冊。(ルナ)



マチルダとふたりのパパ

2019年 岩崎書店
メル・エリオット (作)、
三辺 律子 (訳)

[2000]

パールの学校に、マチルダという転校生がやって来た。二人はすぐに意気投合して、なかよしに。

マチルダの家にはママがいない。ふたりのパパと暮らしていると聞いて、パールは興味津々。パパがふたりなんて「なんだかっこいい!」。さっそく夕食に誘ってもらって大喜び。楽しみで楽しみで待ちきれない!そして、マチルダの家に行ってみると……?

この後どうなったかは、読んでのお楽しみ。パールの素直な気づきが何とも微笑ましいお話です。

見返しのイラストにもご注目を。(こなつ)